

師走を控えいよいよ寒い日が多くなってきました。お山の熊たちは冬眠に入る前の今、体に脂肪をつけるためたくさんの餌を食べる時期です。しかし今年は山の木の実が不作のためか人里近くにおりて来て、栗や柿を食べる風景があちこちで見られるようです。人間にとっても怖いことですが、熊さんにとっても寒い冬を乗り切るために必死のことなんでしょう。やがて、春は必ずやってきます。これから暫く、冬の間はじっと我慢する時かもしれません。

< 第 1 7 回 ほほえみの会 >

のぞみの会支部会と重なった今回、会員の出席は6人と少なかったものの医師、看護婦、看護部長さんの出席をいただきいろいろと意見交換をすることが出来ました。

偶然にも今回、神経芽細胞腫の方が多く集まりました。入院直後、手術前、末梢血移植中、骨髄移植後とそれぞれの立場の人がいました。入院直後の方は全身転移で絶望感との戦い。手術前の方は移植に向け、兄のHLAを検査したところ一致した兄の末梢血で移植が出来ないだろうか。移植中の方は鼻血が止まらない。それぞれの悩みがあります。

病気の治癒を確率で言うのは難しいし、自分にとっては100か0のどちらかでしかありません。手術、放射線、移植と親はその都度悩み、判断を迫られます。我が子を信じ、病院を信頼して頑張らしましょう。

核家族の中、弟が入院して兄が寂しい思いを強いられ、最近チック症状を見せるようになった。

入院中の兄弟の精神的ケアについては今までも話題になっていることであり、出席していただいた成島看護部長さんに「面会中病院内のどこかでボランティアの方などに面倒を見てもらえないだろうか」とお願いをしました。スペースの問題や、子供の安全性など問題があるが検討して下さるとのことです。

成島部長からはこのほかに「A2の面会時間を自由にしたのは、親子のつながりが特に必要な乳幼児に一日の内、何分でもいいから抱っこしてほしいということから。一時でも自分のわがまを聞いてくれる人がいる。医師、看護婦と親は違うということの子供は学んでいく。」

そのほか、「入院中保母さんがよく面倒を見てくれて、集団生活の遊びやしつけを教えてくれている。退院したときにも困らず大変感謝している」との親の話に対しては、今院内では小中学校の訪問学級が行われているが、学習もさることながら子供たちのストレス発散に効果があり、やがては幼稚園部を作りたいという意向もあるとのこと。

また「親がいないときのことを看護婦さんにもっと教えてほしい」ということには、「どんどん看護婦を捕まえて聞いて下さい。看護婦に受け持ちでないといわれたら受け持ちでなくても知っていて下さいと言って聞いて下さい。」とのこと。そして「看護婦の方も親と話をしたい。不安や落ち込みなど看護婦も親と同じ思いを抱いているのでどんどん話して一緒に頑張りたい」ということでした。

次回は 12月8日(日)12時からです

